

故、自然科学的、または社会科学的な「モデル」に倣わなければならぬのでしょうか？ 最終的に、解釈学こそが最も可能性を秘めた「アプローチ」であると思います。つまり考察対象とするスピリチュアルな文献の「意味」や「メッセージ」を解説することに努めるのです。確かにこの作業は完結することがなく、われわれ各人が到達する結果は、「最終的・決定的」なものではありません。しかしこれは、二〇世紀の終わりにおけるあらゆる文化―特に二〇世紀の終わりにおけるわれわれの文化―の条件であり、宿命でもあると思います」(p. 171, No. 59)。これは、いわば「本質主義的」に「宗教」の探究を行なうことを主唱する、Eliadeの一貫した態度の表明である。

ドイツの宗教史学者 Kurt Rudolph は、Eliade の宗教研究を批判して、Eliade 自身が自分の立場を history of religions と称しているにもかかわらず、それは真の意味での Religionsgeschichte (宗教史) ではないと論じている。究極的には、Eliade と Culiannu は、その方法論上の方向性が厳密に一致するとは思えないにもかかわらず、この Rudolph などからは、彼らは同類に見えていたに違いない。

しかし、むしろ、最終的に Culiannu が主張したような宗教研究の立場を Eliade が認めたかどうかは微妙であろう。Rudolph などの批判がどうであれ、Eliade が history of religions すなわち history (histoire?) に固執したのに対して、Culiannu は言葉の真正な意味で science of religion (「宗教を科学する」) さらには「宗教が／も科学である」を目指していたと言えるのではないか。そして、この点で Culiannu が、何ら

かの仕方で行き過ぎていたのだとしても、そこには、「宗教」なる学問の一つの本質が、むしろあらわな形で示されているのではないだろうか。

亡命者エリアーデの思想における「宗教」

奥山 史亮

本稿は、ミルチア・エリアーデの非還元主義的宗教概念を、エリアーデの亡命ルーマニア人としての活動の中に再定位することを目的とする。今日の宗教学において、政治的、経済的要因に還元不可能な「宗教」を提示するエリアーデの方法論は厳しい批判を受けている。これらの批判に対して私は、エリアーデの非還元主義的宗教概念はこれまで注目されることのなかった亡命ルーマニア人組織におけるエリアーデの言論活動と重ねあわせることによって、初めてその意義が明らかとなると考える。本稿では、特に、エリアーデが宗教の還元不可能性を論じる際に用いたスピリット (spirit) という概念が、一九九二年にブカレストで出版された『絶望に抗して』(Impotriva deznađejdei, Humanitas, 1992) に収録されている亡命ルーマニア人組織の機関誌に掲載されたエリアーデの原稿において、如何なる文化的役割を担っているのかを明らかにする。

エリアーデは一九四五年にパリへ亡命した後、亡命ルーマニア人組織の設立を経済的に支援していたラデスク将軍 (Radu-

第1部会

scu)の参謀役であったブルトゥス・コステ (Brutus Coste, 一九一〇—一九八四)らと協力することによって、亡命ルーマニア人組織の設立と運営に尽力し、それらの機関誌に論考や小説を掲載していた。エリアーデとコステの往復書簡からは、パリに亡命していたルーマニア人たちの間には、様々な政治的、経済的利害関係に基づく対立があったことが確認できる。そのような状況に対してエリアーデは、亡命ルーマニア人たちが政治的、経済的利害関係を超越して団結することで、社会主義政権によって破壊されていく祖国の伝統文化を存続させるための文化活動を展開する必要性を訴えていた。エリアーデは『ルーマニア同盟』に一九五〇年一月二月に掲載された「絶望に抗して」において以下のように述べている。「深刻かつ重大であるのは、懐疑や不信、恨みといった雰囲気次第に亡命者全体に広がりつつあるという事実である。我々各々の義務は、我々の精神的統一性を脅かす雰囲気に対して闘いを挑むことなのである。(中略)我々が身を置いている鉄のカーテンのこちら側での歴史的状况においては、我々にできることはただ一つ、文化のみである。実際、文化こそが我々の担っている唯一の責務なのだ。すなわち可能な限り、ルーマニアの文化的創造の継続性を救い出すということである」(Ibid., pp. 65-66)。この引用文からは、ルーマニア文化の存続をかけた文化的闘争に参加するために、「スピリットな価値」を意識のうちに見出すことで同胞間の政治的対立を乗り越えていくことが亡命者にとっての最重要の課題であるというエリアーデの信条が確認できる。そしてエリアーデは、ルーマニア民族のスピリットな価値はマノ

ーレ親方伝説」(Balada Meșterului Manole)や「三オリツァ」(Morita)といったルーマニアの代表的フォークロアから析出できると述べている。

これらの亡命ルーマニア人組織の機関誌に掲載されたエリアーデの原稿を読解すると、エリアーデは、個々の亡命ルーマニア人たちが抱えていた多種多様な政治的信条や経済的状况を超越してそれらを包み込む文化共同体を創造するための共通価値を提示するために、政治や経済的要因には還元不可能なスピリットをフォークロアや神話から析出しようとしたのだと考えられるのではないであろうか。確かに、エリアーデの非還元主義的宗教概念は「宗教」を他の文化的要因から切り離して特権化する規範性や普遍的志向を有している。しかしその規範性や普遍的志向は、信条や利害の対立を包み込むルーマニア民族固有の文化的価値を創造するという目的を実現するために、エリアーデが意図的にとった立場であるとも考えられるのではないだろうか。

宗教における思考と感謝

浅野 章

はじめに

「思想としての宗教」は、今学会のテーマとみてよいと思う。思考なくして思想はない。思考と宗教のかかわりが問われる。感謝は日常的普遍的に認められるが、体験の深化は宗教的様相